

コラム～2022年度参加者は今！～

# 国際理解教育とSDGsの推進に向けて！

所属校	つくば市立春日学園義務教育学校	実施者	國谷 雅之
-----	-----------------	-----	-------

昨年度、JICA教師国内研修に参加して、今までに経験したことのないたくさんの経験をさせていただいた。それによって世界に対しての見方や考え方が大きく変わったように感じている。学校では、子どもたちとともに、世界の現状を知ることで、自分たちの置かれている環境が当たり前ではないということを改めて認識した。世界に対してSDGsの視点を踏まえ、より広く物事を捉えていく必要性を感じ、一緒に考える実践を行なった。

実践を行なって、生徒に考えさせるだけの授業ではなく、我々教員がもっと国際理解を図り、SDGsに真剣に向き合っていかなければいけないのではないかと気付くようになった。そして、教員といえども知らないことがたくさんあるということから、子どもと一緒に課題を考え、発見していくことの大切さも併せて感じる事ができた。

今年度、つくば市教育研究発表会において国際理解教育研究部での発表を仰せつかった。英語科担当、日本語教室担当の先生方が多い中、私のような国際理解教育の経験の浅い者が発表の機会をいただくことなど大変恐縮ではあったが、本校で行なった「自分たちで考える自分たちの未来！！」持続可能な未来のために、春日式 SDGs！！を発表させていただいた。発表では、世界の現状を正しく見極めることを念頭において行なった。自分たちが正しいと思っている世界への理解と発展途上国や貧困国への支援が、果たしてその国の本当に必要な支援になっているのかという、表面だけではない裏側の部分にまで目を向けることで、本当に必要な支援が見えてくるのではないかと考えた。JICA で学ばせていただいたことを紹介させていただきながら伝えたことで、聞きに来られていた先生方も真剣に聞いてくださったように思う。

我々一人ひとりができることは、小さなことかもしれないが、0が1へ、そしてその1が広がり大きな輪になっていくことを期待しながら、これからも「自分たちの未来」に向けて発信していきたいと考えている。

先生へのメッセージ

保健体育の観点からSDGsについて学ぶ、という内容がとても興味深かったです。私は英語科ですが、保健体育や理科、社会、数学など他教科ともコラボレーションして、世界の課題について、具体的に考えてみました。ありがとうございました。

先生へのメッセージ

MDGsからSDGsへ。先生の生の声と子ども達へ届け、一緒に考えていく。貴重な機会に当たって思いつく、小エッセイをまよふに、お返事もActionをおこなっていくことが大事です。ありがとうございました。

先生へのメッセージ

実践発表ありがとうございました。とても勉強になりました。支援した後の様子や支援先の様子にまで目を向けて考えることで、より自分身として子ども達が捉えられるなと感じました。これからの3年間に活かしていきたいと思っております。お忙しい所、お疲れ様でした。

国谷先生へのメッセージ

本年度、本校で新しく設けられたSDGsクラブを担当しております。先生の実践は大変興味とめて打聴させていただきました。具体的な情報と生徒に提示し、様々なセオリーで課題を見つけて解決策を考えさせる取り組みは私もクラブで実践してみたいと思っております。また先生の情熱にも感動致しました。9月にJICAさんとお招きしてクラブと実施します。私も学びたいと思っております。

コラム～2022 年度参加者は今！～

## SDGs を知って見えてきたこと

所属校

つくば市立上郷小学校

実施者

白澤 拓也

昨年度、SDGsについて、多様なアクティビティやゲームから学びを深めた児童らは、今年小学5年生になった。私は小学3年生の担任になり、児童たちと会う機会はかなり減った。彼らの中に何かを残せたのか確かめる術がなくなった。しかし、5年生と廊下ですれ違った時に、「昨年度できなかったことを今年やろうと思っています。」「今年もまたSDGsのゲームをやってるんですか？」などと、声をかけてくる。また、5年生の担任に話を聞くと、「環境問題について、自分たちにできることを考えて実践しようとしているよ。」と言っていた。このことから、彼らの中にSDGsという知識や開発教育の意識は育まれていたのだとホッとす。それと同時に、どうやら彼らの中で私は、SDGsが大好きな人という認識であることが分かった。

教師国内研修を通して、私は主に3つのことに取り組んだ。1つ目は、先述した多様なアクティビティやゲームを行うことで、SDGsという言葉が難しく捉えないようにすることである。2つ目は、校内の掲示板を有効的に活用し、全校児童、教職員に対しての情報発信、問いかけを日常的に行った。そうすることで、学校内全体で、国内研修で学んできたことを共有することができた。3つ目は、他教科の学習と関連付けながら、考えを、必ず実践させて、ふりかえる活動を意識して行った。これらの取り組みで、劇的に何かが変わったわけではないが、子どもたちと、教職員のSDGsや開発教育について、考えるきっかけづくりをすることができたのではないかと考える。

そして今年、教師海外研修に参加することができ、ラオスに10日間滞在した。初めての途上国への渡航であったため、ワクワクする気持ちと緊張感が入り乱れていた。現地で、どのような視点で視察をすればいいのかについても悩んだ。しかし、昨年度の国内研修で学んだことを振り返り、SDGsという視点で物事を捉えようと考えた。このことで、視察時に学びのある研修にすることができた。そこでの体験や得た教材を今後、どのようにして伝えていき、自分にできることをどのように行動していくかをこれからも考えたい。

昨年度の国内研修と、今年度の教師海外研修を通して、自分の価値観の変化と、視野の広がりを体感している。国内研修に参加しなければ得られなかった知識や繋がりを今後も大切にしながら、自分の変容を楽しみつつ、子どもたちに多くの気づきと学びを与え続けていきたい。



2023 年の教師海外研修で知り合ったラオスの大学生とラオスと日本の良さを比べる交流授業を行った。



ラオスで手に入れた資料を廊下に展示。どの学年の児童も興味津々で、手にとっては様々な話をしている。

コラム～2022 年度参加者は今！～  
**“学び”を“カタチ”に！**

所属校	宇都宮市立姿川第二小学校	実施者	仲田 志穂
-----	--------------	-----	-------

昨年度の総合的な学習の時間に「姿二小の環境会議を開こう」という、環境をテーマとした学習を行いました。電気、ガス、鉛筆、机、洋服、ポテトチップス、アイスクリームなど、自分たちの身近なものが世界の環境問題につながっていることに気づき、「何とかしなきゃ！」という気持ちが高まった子どもたち。電気をこまめに消すことや、食べ残しをしないことなど、自分たちにできることを考え、実践に生かす姿が見られました。その中の一つの取組として、今年度、本校では委員会活動の一貫として「届けよう、服のチカラ」プロジェクトへ参加をしています。ファーストリテイリング（UNIQLO や GU 等）が UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）と共に取り組む活動で、古着を回収し、難民キャンプ等の子どもたちへ届ける取組です。自分たちが着ている服は誰が作り、どこから来ているのかを考える活動を通して、児童労働の問題や服の大量廃棄の現状を知った子どもたちが、自分たちに出来る取組を調べ、この活動への参加が決まりました。より多くの服を集めるために、告知の仕方を工夫したり、ポスターや回収ボックスのデザインを工夫したりしながら、活動に取り組んでいるところです。自分たちの“学び”が“カタチ”になることで、充実感や達成感を味わうことができたことと思います。これからも、子どもたちの考える“世界のためにできること”を、“カタチ”にしていけるような取組を考えていきたいと思っています。



【告知用のフリップづくりの様子】



【子どもたちが作成した回収ボックス】



【服の仕分け作業の様子】



【1回目の回収期間では、1662 着の服が集まりました！】

コラム～2022 年度参加者は今！～

## 始動！！地球にやさしい学校づくり

所属校	桜川市立桃山学園	実施者	谷中 達也
-----	----------	-----	-------

昨年度参加した「教師国内研修」では、多くのフィールドワークを体験させていただき、循環型社会の大切さを学びました。そこで、今年度は昨年度学んだことを生かし、学校の中で地球にやさしい学校プロジェクトを委員会ごとに立ち上げ実践しています。具体的な取り組み内容を2つ紹介させていただきます。1つ目は飼育栽培委員会による肥料づくりです。学校では、4羽のウサギを飼育しています。学校給食でパンの残飯が出た際には、飼育栽培委員会が給食委員会と連携を図り、残飯を集めます。その残ったパンをウサギの餌に活用して、残飯0を目指しています。この取り組みはウサギの餌になると言ったことだけに留まらず、ウサギが排泄の際に出したフンを飼育栽培委員会がウサギ小屋掃除の際に集め、肥料づくりにまわします。同様に職員室で先生たちが毎日飲むコーヒーには、コーヒーマーカーを利用して作っているので、放課後コーヒー豆のカスが発生します。そのカスに注目した委員会の生徒が肥料づくりに利用できるのではないかと気づき、ウサギのフンとコーヒー豆のカスをミックスさせて肥料を仕上げていきます。肥料づくりに、専門家の知識も必要になってくるので、近隣の農業高校からもアドバイスいただきながら、中高連携の視点でも循環型社会の実現を目指し、学校を超えた地域一帯での取り組みにもなりつつあります。

2つ目は、8学年による学年生徒会による、郷土自慢ポスターづくりです。循環型社会の実現の多くは、自然環境の保全といったイメージになるかもしれませんが、生徒たちの視点から考えた場合は、自分たちのすんでいる町の魅力を伝え、何十年たっても住み続けられる町にしたいとのことでした。実際に桜川市が過疎地域になりつつある現状を踏まえての考えだったのだと思います。多くの人が故郷で働いてもらいたい。U ターンやI ターンの人材を活用した住みよい町づくりにするためにも、桜川市のことをもっと好きになってもらいたいという願いから、地域の魅力を発信するポスター制作することにしました。制作するのは、8学年全員で取り組みました。地域の魅力だけでなく、茨城県教育委員会で中学2年生を対象とした「いばらきっ子郷土検定」の問題にも関連させながら、ポスターの内容に県や市町村の魅力や解説も付け加えて仕上げることができました。出来上がったポスターは廊下に掲示し、みんなで共有することができました。地球にやさしい学校づくりを考えた際に、地球規模といった大きな枠組みにとらわれず、まずは、身の回りのことから、問題点を見つけ行動に移せた子どもたちの姿をこれからも育てていきたいです。



農業高校での循環型社会の講義



肥料づくりに取り組む生徒



生徒が作成した郷土ポスター

コラム～2022 年度参加者は今！～

## 身近な一歩から

所属校

日立市立日高中学校

実施者

横倉 由佳

今年度も引き続き日高中学校に勤務しています。昨年、教師国内研修で学んだことを役立てたいと考え、2学年の総合的な学習の時間に「身近に考える SDGs」をテーマに授業をさせていただきました。昨年担当していない学年だったので、教師国内研修や JICA で学んできたことも話をすると、生徒たちはアジア学院や JICA の活動について興味をもつ様子が見られました。

最初に「国際理解教育実践資料集」の中の「学校に行けない子どもたち」についての学習を行いました。カードを使って、学校に行けないことによって生じる負のスパイラルに気づき、それを断ち切るためにはどうすればいいかを真剣に話し合いました。自分たちの学校生活と比較して考えた生徒も多く見られました。自分たちが今できることは何かを考える中で、まずは「知ること」が大切だということになり、「SDGs フォトコンテスト」を試みることにしました。何気なく使っているものも、「持続可能」という視点から見ることができると気づき、たくさん例を見つけることができました。「ジブンゴト」として捉えた上で、先の「学校に行けない子どもたち」に戻って、これから私たちができることは何かを考えました。

昨年の資料を使って授業に臨み、担当学年の先生方にもいろいろなアイデアをいただきながら実践することができました。先生方からは、「SDGs の授業と言っても何から始めていいかわからなかったので、資料や昨年の話に助けられました。」という声も聞かれ、昨年の学びを生かすことができよかったと思いました。図書室や職員室にも頂いた資料を置いておき、総合的な学習の時間だけでなく、各教科や道徳など関連した教材の際にも先生方に利用してもらったり、生徒が自由に使えるようにしたりしています。

昨年の JICA での学びが、「SDGs って何から始めたらいいのかわからない…」という高かったハードルであった不安を払拭し、「国語の先生」「進路の担当」だけでなく「SDGs を教えてくれる先生」にしてくれたことが嬉しかったです。今後も機会を見つけて、実践に努めていきたいと思っています。



2年を対象に、授業をしました。



学校に行けない」カードを使って、自分たちの生活を考えられています。



生活の身近な中から、SDGs を探しました。